

聖書宣教会通信

〒205-0017 東京都羽村市羽西2-9-3 Tel 042(554)1710 Fax 042(554)5562 振替・00150-6-34971

巻頭言

「叙述ではなく告白」

川越聖書教会牧師 岸本 紘
聖書神学舎教師



それなりに歳を取り、先行き短く、期待されることも少なくなったと思い始めた矢先、原稿を書けとのことです。そこでふと、ふだん見ることのない聖書宣教会のホームページをのぞいてみることにしました。それが大きな発見となり、深く心探られるときとなりました。年寄りじみではいられない気にさせられました。

「叙述ではなく告白、学問でなく研修」。ホームページの冒頭を飾るのは、来春をもって創立50周年を迎える母校の、創設者のことばではなく、卒業するだれかが言い残したというものでした。この学校らしいと思いました。よく言うてくださった、アーメン、そのとおりです。

叙述ではない！ 叙述だけではない。はっきり言って「みことば、みことば」と高言し、正確さ、厳密さを求めつつ、それでいて力もいのかも涙もない、これがみことばの「説き明かし」であるか、これが証しの生活であるのかと、一撃を喰らいました。叙述に終始していないか、感嘆符も、疑問符さえもない人生と奉仕なのではないかと。「神のことばは生きていて、力がある」（ヘブル4：12）という、そのみことばを受け取らせていただき、熱意をこめて告白する者にしていただきたいと、思いを新たにしました。

高齢化、少子化、都市部の人口集中などが社会にひずみと停滞を生んで久しく、「歴史は右肩上がり」とした私たちの年代の幻想は音を立てて崩れました。そんな昨今、教会に人々が、教会学校に子どもが、神学校に学生が、集まらないことを、伝道熱意の衰退のせいにするだけでは不適切だとしても、逆にまた、これら社会要因に宣教不振のすべてを押し付けるものであってはなりません。

いとも単純な算数ではあるけれども、私たちの子や孫が恵みによって信仰を受け継ぎ、その

上に今までと同じペースで信じ救われる人々が加えられただけでも、教会は豊かな実を結ぶのではありませんか。もとより救いの主権は神ご自身にあります。しかし、蓄積すべきいわば「基礎票」をおろそかにし、いつも「新規開拓票」ばかりを追い求めているのが、私たちのもったいない現状ではないか。燈台もと暗く、手元での取りこぼし。まったく計算の合わないことではないでしょうか。

けれども、妻子と家財を対岸に奪われた丸腰のヤコブは、絶望の暗夜に格闘し祈りました、「私はあなたを去らせません。私を祝福してください。さらなければ」（創世記32：26）。祝福されなければ、私たちはただ泣いて祈るほかありません。やがて夜は明け染め、ヤコブ自身が神のものとされ、そのうえすべてをその手に新たに受け取ったのでした。私たちも手元から始めて祝福を受け取りなおすことができるのでしょうか。こうして信仰と教会は神ご自身の御手の中で真に深さと高さで厚みを増していくでしょう。

「叙述ではなく告白、学問でなく研修」。そうです、「職業 (Beruf) は神の召し」という、語の本来の意味において、神学校は明らかに職業訓練と研修の場です。叙述でなく告白する人々の、訓練と研修の場として、神学校はいつの時代にも大切な場所です。そして神学校は教会の働きです。神学校は、苦難と苦闘に耐えうる奉仕者を育てるために、粘り強い働きが常に期待されます。私たち諸教会は、神学校と太いパイプで結ばれて、いつもそこに目を注ぎ、惜しみない充分な祈りと献金をもって支えていきましょう。

御子イエス・キリストのご降誕を祝うクリスマスの恵みにあずかる時が今年も与えられていることを心から主に感謝いたします。大きな暗闇の中にも、いつも慰めに満ちた一筋の希望の光が、主にあって、与えられていることを確認させていただけるからです。

しかし、6月に遠藤嘉信先生を、また9月に岳藤豪希先生を天の御国に送った今年のクリスマスは、教職員や研修生たちにとって、格別寂しさを憶えるクリスマスでもあります。残された者たちが、主によって与えられている地上での生涯で、上にあるものを求めつつ、今の時を生かして主のみわざにいそしむようにとの静かな促しと受けとめています。

このような中、11月にもたれた第25回賛美礼拝は、ひとしお感慨の深いものがありました。雨天にもかかわらず、昨年よりも多くの方が、特に初めての方々が多く来てくださり、詩篇33篇によって共に「創造主」なる神を、恐れと喜びをもって礼拝し、主の恵みを待ち望む時を持つことが出来ました。

秋のリトリートにおいては、来年度、創立50年を迎えるにあたって、研修生たちと共に「ヨベルの恵みとこれから」について考え、時を支配し、全てをご存知であり、所有しておられるお方が、ご自身の方法でご自身のみわざを行われることを確認し、人間の策略や知恵によってではなく、主を恐れ主により頼んで行くべきことを再確認させられました。

これらのことを憶えつつ、聖書宣教会が「モリヤ問題」によって問われてきた諸問題について、その最終報告を、来年度出来るだけ早い時期に行い、その後、2009年4月には、新しい体制での出発ができるようにと願っています。

来年3月の卒業・修了を控えている9名の研修生達の最後の学びが続いています。卒論などの学びと共に、羽村にいる間に、一人一人が主から直接お取り扱いを受けて、主のみこころを

確信して、ここから遣わされて行くことができるようにお祈りください。秋の「祈りの日」は、講師の先生が牧会しておられる教会での葬儀のために突然来られなくなり、みことばと賛美と祈りのなかに、静かに一日を過ごすゆったりした時が与えられました。

新体制に向けてのカリキュラムの改訂作業が続いていますが、その一環として、来年4月から、従来のシニアコースが一足先に新「聖書科」として再出発することになりました。これは、世代を超えて、伝道の重荷を与えられ、主から明確な召命を受け、「教会の多様な働きにつくことを目指す方のため」2年コースです。聖書神学舎らしい教育、何よりも聖書そのものの説き明かしが出来るような基礎的な訓練が受けられるようにしたいとの願いがあります。なお、従来の聖書科は「聖書講座」として継続されることとなります。（詳しくは、2008年度の要覧をごらんください。）

牧師・伝道者養成のための「本科」がギリシャ語とヘブル語の両言語を履修することを前提にしているのに対して、「聖書科」では聖書言語はどちらか一つを選択することになります。さらに、聖書や神学の諸学科を学んで、修了後に超教派伝道、特殊領域の伝道等に従事する人々に相応しいコースとなるように願っています。もう1-2年の学びを続けるなら、「本科」を卒業するという可能性もあります。現代の教会の多様な必要に応えるためには、神学教育がまず何よりも聖書の基礎的な学びを土台とするものでなければならぬと私たちは考えています。主が、聖書宣教会の提供する神学教育を、ご自身の栄光のためにお用いくださるようにと、お祈りくだされば感謝です。

同時に、新しい世代の教師たちが神学教育に対する重荷を、主から、与えられて、教師陣に加わってくださるようにお祈りください。

クリスマスの祝福をお祈りしつつ。

岳藤豪希先生が主のみもとに召されました

岳藤豪希先生は、9月17日、地上の72年の生涯を終えて、主のみもとに召されました。一昨年来の重篤の闘病を皆さまのお祈りに覚えていただき、ありがとうございました。

岳藤豪希先生は、1973年にドイツから帰国して以来、多方面での教会音楽の働きの中でも、とりわけ聖書神学舎での教鞭を大切にしてくださいました。教会音楽家養成講座、聖書神学舎教会音楽科を設立し、1993年には教会音楽舎となった働きの教師会議長となり、2003年に名誉教授となるまで学舎で教鞭を執られました。50名を超える教会音楽関係の卒業生をはじめ、聖書宣教会の全体に感化を与え、諸教会の教会音楽に大きな貢献を遺して地上での働きを終え、天の御国に帰られました。

岳藤豪希先生の思い出

～ただ主の栄光のために～

聖書神学舎教師 矢吹綾子

「バッハの作品のほとんどは、神様の栄光のため作曲されたものです。」

岳藤豪希先生は、御自宅にあるバッハの楽譜を見せながらお話してくださいました。聖書宣教会への入会のための面接（当時は、百合ヶ丘の先生の御自宅が聖書神学舎・教会音楽科の教室でした。）で、初めて先生とお会いした日のことでした。

私は大学2年生の時、詩篇40篇3節の「主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、主に信頼しよう」のみことばにより献身の思いが与えられました。大学卒業後、すぐには道が開かれず、高校の教師として歩んでいました。仕事にも慣れ、だんだん献身の思いから遠ざかってしまっていた頃、もう一度神様からの問いかけがあり、どうしたらよいか迷っていました。聖書神学舎に教会音楽科があることを知り、事務に問い合わせると、豪希先生に直接電話してくださいとの事でした。祈りながら電話をかけると、ちょうど先生が出てくださり、面接の時間を作ってくださいました。そして、みことばの宣教のために音楽を用いていくこと、これこそが教会音楽の使命であることを日本の教会に伝え、教えるためにドイツでのカントールとしての働きを辞めて帰国されたというお証しをしてくださいました。この日私に、献身への歩みに一歩踏み出す確信が与えられました。そんな私のた

めに、先生が力強く祈ってくださったことを、今もはっきりと覚えています。その日から20年以上、先生から多くのことを学ばせていただいたことを主の恵みと感謝しています。

先生のオルガンのレッスンの時は、毎回とても緊張しました。私は礼拝の奏楽をはじめ、オルガンを演奏する前は、緊張感がなくならないように食事を取らないようにしているのですが、先生のレッスンを受ける前も同じく食事は取らないようにしていました。それは、曲がどのくらい弾けるかということよりも、どれだけ基になっている賛美歌の歌詞を理解しているか、オルガンで何を語ろうとしているかが問われたからです。「音楽は消えてしまうけれど、みことばは永遠だからね。綾ちゃん、大切なのは聖書だけだよ」とレッスンの度ごとにお話してくださいました。

またエヴァンゲリウム・カントライの演奏会の時、先生のオルガン演奏のアシスタントをさせていただいたことも私にとってはすばらしい学びの機会でした。コラール前奏曲を弾かれる前は、楽譜に書かれている歌詞やみことばを読まれてから弾かれていた姿に、演奏の姿勢を教えられました。そして演奏会の最後には、あまりの感動に会場の拍手が鳴り止まないようなことがしばしばありました。そのような時、先生は天を見上げ、天を指差しながら拍手をし、「拍手は神様にしてください」とジェスチャーで示されました。その姿が印象的で目に焼きついています。

常にみことばに仕え、主の栄光のために歩まれた豪希先生の後には続き、力不足ではありますが、みことばの宣教のため、祈りつつ、学び続け、励んでいきたいと思えます。

同窓会のこえ

同窓会の一員として何が出来るか？

九州地区同窓会会長 松崎 義治

「九州にお出かけの際には、パスポートをご持参ください。飛行場では提示する必要があります」と中央から講師をお招きする際には、冗談としてこのように申し上げています。世界中の情報を瞬時に入手し、交通手段が網の目のように張り巡らされた国内は、さほど苦勞せず各地に出かけることが出来ます。しかしながら、距離として遠方の他の地区同様に、羽村を遠く感じるのは私だけでしょうか。だからこそ母校との関係を大切にする必要を感じているのです。九州地区の同窓の先生方も似たような気持ちを持っておられることでしょう。

また同窓生として、何が出来るだろうかと問われています。何か大きい事を計画しようと思っただけではありません。地方の教会に限らず、多くの教会が持つ共通の課題として、新しい開拓伝道に必要な働き人、教職者の高齢化に伴う後任牧師の必要性が挙げられます。これらが聖書神学舎の働きと密接に結びついている

のは言うまでもありません。もちろん神学舎の働きを支える一環として、祈りやサポートを前提としているのですが、主が教会に献身者を起こして下さり、彼らに学びの機会が与えられるとすれば、まず神学舎へ派遣するという大切な使命が託されていることを改めて考えさせられています。

この事は当方の個人的な事ですが、田舎に住む者として中央と比較したら学びの機会の少なさを痛感していた献身初期に、しかも30歳を直前にして学びの機会を提供して頂いた神学舎の恩を決して忘れることが出来ません。それらは個人的なことと同時に多くの卒業生の方々に共通することでしょう。神学舎あつての同窓会なのです。

さらには、神学舎の存在を今まで以上に九州地区諸教会に知って頂くために、各聖会等に神学舎の先生方の紹介をさせて頂いております。現在九州地区では15名の同窓の先生方が働いておられます。人数としては少ないのですが、地道な活動が続けられていますし、九州からも聖書宣教会・聖書神学舎のために祈っております。

聖書宣教会のために祈ってくださる皆さまに心から感謝しています。 近況と祈りの課題をお届けします。

- 鞭木師の会長就任から一年になろうとしています。ここに至る主の守りと導きを認めて感謝し、改めるべきを数えつつ、なお新しい体制へと備えを続けています。聖書宣教会が、正しく主に仕え、教会の働きとして整えられてまいりますようお祈りください。
- 卒業、修了のために備えている9名の研修生の学びとこれからの歩みのために。ほかの17名の本科研修生の学びと訓練の日々を、主が祝して下さるように。
- この時代に、主の働きのために召された人々が、正しく主に応答して歩み出せるように。聖書宣教会にも、主のみこころに従って入会希望者が導かれるように。
- 教師・講師と職員、責任役員会と評議員会が、主から託されたそれぞれの責任に忠実に仕えることができるように。
- 一般会計は年度上半期を締めました。収入合計34,293千円、支出合計37,379千円となり、年度内収支で約300万円、繰越収支残でも100万円強の不足となります。
- 聖書宣教会にかかわる人事、財務、その他のすべての必要を、主が、主のときに、主の方法で十分に満たして下さるように。

編集後記

一年を振り返って、改めて、大きな変化の中に置かれていることを感じています。ここから、主は私どもをどこへ導いてくださるのでしょうか。御声を正しく聞き分けてお従いできますようにと祈られています。

深い闇に直面しているこの国、この世界にあって、まことの福音を輝かせる主の教会を、主が顧みてくださいますように。私たちのところに來られたまことの光が力強く宣べ伝えられる季節でありますように。主の助けと祝福をお祈りしつつ。(A)